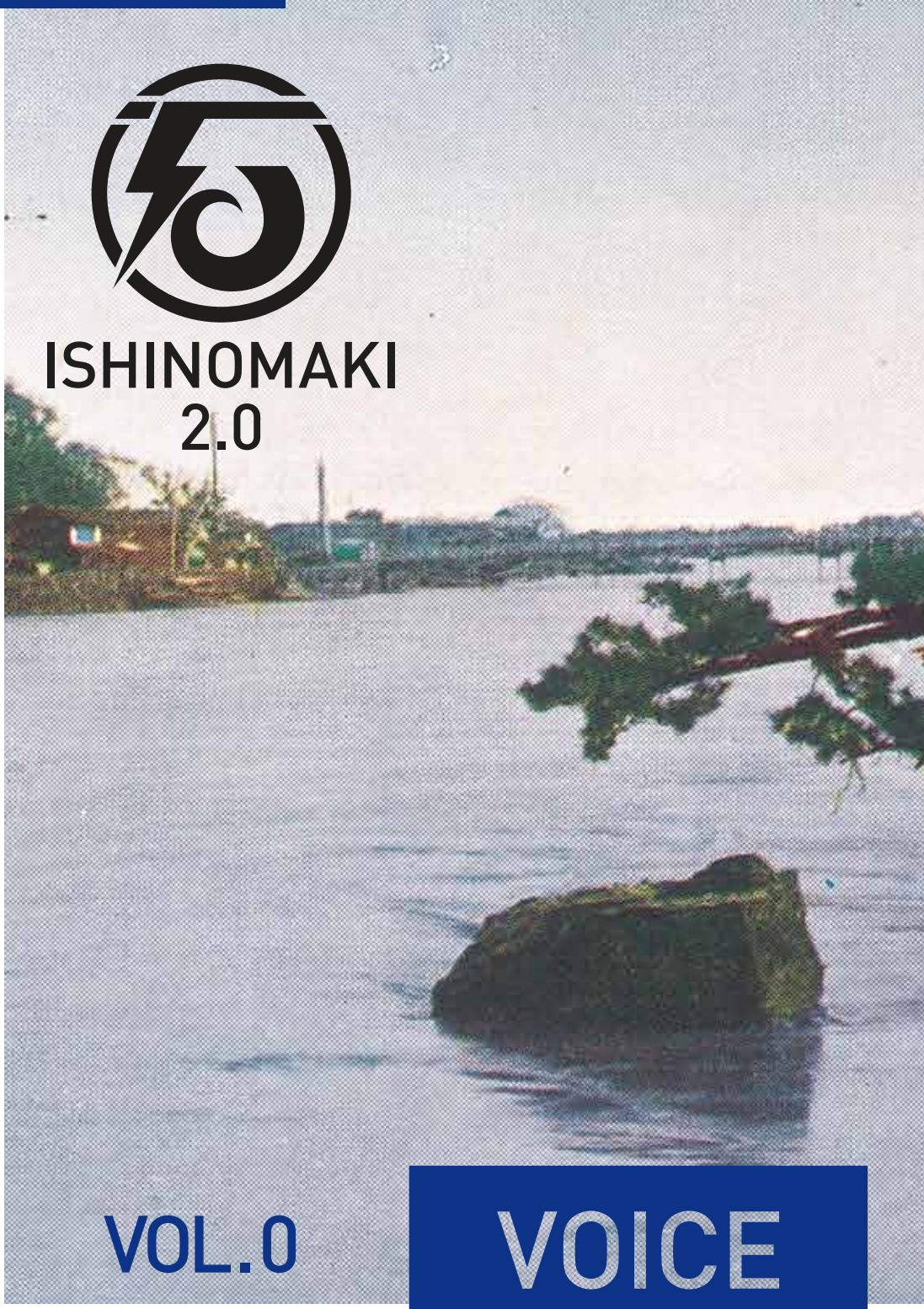
ISHINOMAKI 2.0



VOL.0

VOICE

死亡行方不明者数、合計五千名以上。
東北の市町村の中で最大の被害が出た街、石巻。
一方で、地震以前から郊外型大型ショッピングモールの台頭で、石巻の象徴であった市の中心部商店街には、いわゆるシャッター街が形成されていった。
同時に大都市への人口流出で過疎化も進行するなど、日本の地方都市が抱える典型的な問題も抱えていた。

三月十一日の震災をきっかけに、その中央商店街から復興の狼煙を上げたい。
そして石巻を復興させたい。
石巻を通し、被災地の復興モデルを提案して、東北復興の手助けをしたい。
私たちは、そう考えました。

昨日より今日より、明日を良くしたい。
自由闊達な石巻人のDNAで、全く新しい石巻にならなくてはいけない。
その思いを込めて、〝石巻2.0〟という名前を付けました。
私たちは新しい石巻を幅広い智恵と縦横無尽のネットワークにより、草の根的に作ります。

この石巻2.0 第0号〝VOICE〟では、未曾有の困難に対し、強靭な人間力によって立ち向かい、一日一日を乗り越え続けている石巻人の声を集めました。
そこから見える厳しい現実と、未来への光明。
少しでも多くの人々へ、この現場からの声〝VOICE〟が、届きますように。

邊見清二
阿部久利
松村豪太
阿部紀代子
西條允敏
阿部明
沖元太一
内海公恵
千葉隆博

石巻千石船の会　会長

邊見清二

若い頃は産經新聞の記者を生業にしていましたが、その後辞めた後は建設省の時代から国土交通省の川の担当の仕事で、岩手と宮城の事務所のお手伝いで河川行政を十年以上やってきたんです。岩手と宮城といえば北上川ですから。

私の仕事は、両県の北上川流域で川に関する各種情報の収集調査でした。

現在、私は「石巻千石船の会」という団体の代表をしていますが、江戸時代の廻船問屋の末裔さんなどを集めてつくった組織です。

平成七年に結成したので今年で十六年になりますね。私は廻船問屋の家系ではないのですが、取材先でいろんな人と会ってるうちに、「うちも昔、廻船問屋やってました」と言う人がいっぱいいました。皆さんをよく知ってるのは私だから、皆さんに集まっていただき、昔は皆さんのご先祖さんは同業者だったのですから、これをご縁に会を作ってはどうですか？」って言って作っていただいたっていう経緯もあるんです。ご先祖さんを調べることは、このまちの歴史の解明につながることですから。「それぞれの立場で、石巻の古い時代のことを調べて伝えて行くことをこの会の目標にしましょう」ということで今日まで続いている会です。

今回の震災で私の自宅は、地震と津波で大規模半壊でした。

ご先祖さんを調べることは、このまちの歴史の解明につながることですから。

100年前の石巻中央。
牧山から中瀬を望む。

この辺は水がひくのが早くて良かったんですが、石巻駅にかけた北側、石巻線の北側は、すり鉢状の地形で水没が続きました。

戦後石巻線の北側に作った住宅街と今のバイパスは昔の田んぼを埋めて造成した市街地ですから、元々グランド面が非常に低くて、すり鉢の底状態だったんです。震災の後、その日の夕方あたりから北上川から下水路を伝って入り込んできた水が、市街地をかなり広範囲に水没させるんですね。津波は南側の海岸部から石巻市街地を襲い、西側は定川と北上運河、北と東側は旧北上川に囲まれた湊・石巻・門脇のかつて例を見ない範囲が被災します。

旧北上川を北上した津波は、石巻大橋下流の無堤防の湊・石巻亮地区を直撃。石巻地区は川沿いの中央、住吉町、元倉から内陸の立町、千石町、鋳銭場、穀町のほか地盤の低い西・北部の駅前北通り、東中里、南中里、中里地区は直接の津波と下水路を伝わり浸水。場所によっては北上運河からの水も。また運河の逆流で旧山下地区の低地の清水町、新橋、錦町、貞山などが堤防の越水または運河に通じる下水路からの流入により浸水。鰐山丘陵地をのぞいたわずかな地域がかろうじて水没をまぬがれたという感じですね。

震災後の後片付けの中から新しい資料が見つかる、嬉しいこともあったんです。でもそういう事はほんと一例ですから、多分失われたものの方が多くて、大きかったと思われますね。

新しく出てきたものは古い明治の新聞とトランクだとか。あるお宅の一階倉庫の中からトランクが出てきて、その中からは卒業証書だとか、明治四十年代頃から、多額の献金をしたときの感謝状だとかね。

あと貴重だったのは、ある建物の火災保険の証券のひとつに明治四十何年のものがでてきて、石巻税務署に貸した建物に火災保険をかけています。それが仲町何番地で建坪何坪で、構造の記述があり、「えー！明治の石巻税務署はあそこで、しかも構造が木造でこのくらいの坪数だった！」とかってのが明らかになったわけです。ある瀬戸物屋さんでは、倉庫から出てきたリンゴ箱の中に陶器が入ってたんです。新聞紙で一個ずつ包んで、壊れないように保存してるんです。持ち主は「被災したから必要な人にどうぞ」と言ってお分けしたんです、みなさんがたに。で、私は「この器よりは包んでいた新聞紙の方が貴重だ！」って。茶色くなって、ちょっと判読しにくい紙面でしたけども、開けてみたら大正十五年でした。昭和十一年の新聞で興味深かったのは、石巻の定期船の会社が営業広告をしてるんですね。「何々航路は一日何便で何時に石巻を出発して、何時に目的地につきますよ」という航路の案内を広告してるわけですよ。昭和十一年は、県境を越えて岩手の一関に行く北上川航路と、今の追波湾、北上川の東側河口の大川航路と二つあったのですが、その追波湾の方にいく航路は戦後の、昭和二十九年まで定期船が運航していたことがわかってるんです。ところが一関に行く船は、昭和十年前後になくなったと言われてますが、何年に廃止されたのかが今でもわかりません。この昭和十一年九月の新聞広告の発見でそのときには既に、北上川航路の定期船が無いことが分ったんです。ですから廃止は十一年の九月以前であるってことがわかるわけですね。

一枚の新聞というけども、様々な情報がつまっているから、見方によっては非常に面白いものですね。

私のライフワークは「どうやってこの石巻っていうまちができたんだろうか？」の解明。この先も死ぬまで多分そんなことを追いかけているのだろうなと思います。●

邊見清二

へんみせいじ

地元石巻の歴史を調べ伝えていくことを目的とした「石巻千石船の会」会長。新聞記者を経ながら国土交通省の河川行政に携わる。震災後、長年集めた膨大なデータを失うも、現在も精力的なフィールドワークを続行中。

有限会社 阿部新 代表取締役

阿部久利

志のある人が集まって発信することによって、潜在的にまちが抱えている問題を解決できる糸口になるのでは？

今、石巻の取り巻く状況は、劇的に変化していると思います。既存の商売が成り立っていないこの現状で、ベンチャーじゃないけど新しいことをやらなきゃって思う人が一人でも二人でも出てこないと、まちの経済の復興って部分では、多分立ち行かなくなると思います。リセットされたわけだから、ここでなにか一つ動きを起こして、それに賛同する人をどんどん巻き込んでいかないと、多分また元の勢力にうまく懐柔されて終わるのかなっていう感覚があります。

震災後、水がひいたのは次の日のお昼くらいでした。とりあえず長靴はいて外に出てまちの中歩いて眺めてみたら、なんか、猿の惑星の最後のシーンみたいな感じなんですよね。静かな中で、いろんなものが壊れて時間が止まってる感じ。

三日目、まちでいろんな知り合いに会って「南浜町壊滅だ」「湊中学校からSOS発信があった」とか、そういう情報が入ってきました。湊中学校近くのデイサービスに、うちのおばあちゃんが行ってたんです。「多分ああいうところはちゃんと避難訓練してるだろうし、みんな生きてるだろうな」ぐらいで、SOS出てた湊中学校にいるのかなと思って十三日に行ったんです、道なき道を。

内海橋には大きい船が乗っかってるからそれ乗り越えないと渡っていけない状態。湊中学校にあと二百メートルくらいで着くかなって時に、職員さんがすれ違いに、「あー、阿部新さん、はまさん（＊おばあちゃんの名前）助けられなかったんです…」ってきて、「は？何それ？」みたいな。その時、改めてこれは大変だと思いました。おばあちゃんの遺体は、近所の民家の敷地内で見つかったんです。それからかな、他のこともやれるかなって感じになったのは。

正直、おばあちゃんの遺体を確認するまではいろんなことには手を出せなかったです。外に出て色々やろうっていうきっかけは、ボランティアさんの存在。泥かきなんかは一人でやったって途方に暮れて心が折れそうで…でもそこにピースボートやボランティアがきてくれて、当初は外人が多くてがたいのいい人が多くてね。一階のフロアなんか二日くらいで全部泥かき終わったんです。「あー…なんかやっぱりこうやって助けてくれる人もいるし、今までそういう気持ちで仕事してたんだよなあ。ここで諦めるのもなぁ…」って思い始めたんです。

お上とか行政では物事は何も進まないっていうのが、今回の一件で分りました。市民同士、有志が集まって勉強会とかして何かを形にしていかないと何も動かないっていうのを体感して分ったんです。

「政治家とか霞ヶ関いらないじゃん。特に国会議員いらないじゃん。官僚さえいればたぶん何とかまわしていくだろうし。国家議員になんでそんな金払わないといけないの？」って思ってる人は、いっぱいいますよね。

それこそブレインストーミングじゃないけど、SNS上でいろんな人たちと情報を交換していく中で、問題が明確化されていったり、いろんな同士に巡り会えました。こういう混沌とした中で、「志のある人が集まって発信することによって潜在的にまちが抱えている問題を解決できる糸口になるのではないか？」というのはなんとなく思ってたんです。石巻2.0はそういう可能性を秘めた組織です。

再開発の話し合いっていうのも必要ですが、それまでのタイムラグに何をして埋めるのか？っていう議論もあってしかるべきなんじゃないかな、と。

僕は今、温かい食べ物をその場である程度だせるような移動式キッチンカーを作ってます。夢としては、それを五人くらい協同で、〝石巻マルシェ〟みたいに復興キャラバンをやってみる。東京とか、関東の方にイベントで呼ばれていってやったら、街の宣伝にもなるし、商工会議所さんとも連携がとれたらすごく良いと思います。将来的には公益法人化も視野に入れて動いていきたいと思っています。●

阿部久利
あべひさとし

現在は、自身の会社経営を復活させる準備に奔走する傍ら、復興市民検討委員会のメンバーとして、地元商店街の若きリーダー的存在として、石巻2.0実行委員として、日々未来の石巻を考える一人

松村豪太

NPO石巻スポーツ振興サポートセンター
クラブマネージャー

「災害に強くしても、人のいないまちをつくってどうするんだ」と。

震災時の話は、誰に聞いてもみんなむしろ聞いて欲しいという方が多い。いくらでも、みんながそれぞれのストーリー、体験、確実に一冊の本になるようなレベルのものを持ってらっしゃいますね。そういうストーリーはどこでも聞けます、もうびっくりするような規模のストーリーが。そこからどう動いたかが各自異なってくるところでしょうね。

九十九パーセントの方は、まあ私も含めて呆然として、もう「この世が終わった」という気持ちでしたね。まず目の前、もう本当に動けるエリアしか、自分の目で見えるエリアしか見えませんでしたので。二〜三日、自分の足で実際いろんなところをなんとか水をかき分け泳ぎながら動いてみて、だんだんこう…実感として。私が綴っているブログのタイトルに付けた「爆心地」という言葉はそのときに出てきたものです。

今回おそらく中心商店街で一番早く復興したのは、私も関わっている、叔父のスポーツショップだと自負しています。震災翌日に店を開けましたから。私自身は総合型地域スポーツクラブのNPO職員なのですが、被災後は目の前で困っている人がいると一緒に瓦礫を撤去したりしていました。そうしているうちに、他の家にも目が向くようになって、叔父が呼んできたサッカー選手などと一緒に、ヘドロかきや洗浄のボランティア活動をしていました。

今度は中心商店街の復興に向けた会合に誘われて、また意識が変わってきましたね。NPO法人でも、事業としてまちづくり活動を定款に含めていますし、ボランティア事業としても活動の幅を広げていきたいと考えています。

石巻は〝眠りゆくまち〟というか、もともと経済や人口が毎年衰退していました。個人的にはなんとかしたいとは思っていましたね。ようやく自分の世代の、三十代半ばから後半の人たちがある程度決定権をもちだしたので、そうした仲間と話して、事業を始めるとかお店をつくるということは当然考えています。石巻では、これまで利用されてこなかったいいものがいっぱいあるので、それを自分なりに活かしつつ、まちをガラっと変えたいですね。江戸時代の頃のものはほとんど保存されずになくなってしまいましたが、昭和のモダンで懐かしい看板が残ってるバーや建物があって、資源としては十分に魅力的です。そして、中瀬もとても面白い地形だと思います。

今あちこちで聞かれる「災害に強いまちづくり」というのは、意味のない安易なキーワードだと思うんですよね。それよりも、文化と経済でしょう。「災害に強くしても、人のいないまちをつくってどうするんだ」と。まあ、そうはいっても地盤沈下で冠水するので、少なくとも小さな堤防は必要でしょうけど。沿岸沿いに建物を建てるのは、そこが大きな足かせとなっています。そこで今、仮設店舗はすごくチャンスだと思うんですよね。屋台のように非日常な演出された空間が自然とできるのは魅力的ですし、避難所に通った経験から分るのは店同士のコミュニティが絶対できるんですよね。今までなかったようなつながりができて、面白い店を紹介しあうような、訪れて楽しいまちになるのではないかと思います。

自ら発信するアイデアの反応を広げて取り入れながら復興のまちづくりをするのは、これまでになかった動きだと思います。こうした活動をしているのを機に、賛同してくれる人がたくさん来てくれればいいですね。●

松村豪太

まつむらごうた

NPO職員としてスポーツを通した地域振興や住民活動をリードする他、石巻2.0プロジェクトの実行委員としても、未来のまちづくりに積極的に関わっている。

http://blog.canpan.info/suport2007/

鰻割烹八幡家

阿部紀代子

まちの人達をちょっと揺さぶる。ずっと朝礼で揺さぶってるんですけど。

朝会をやるようになったのは……私自身、路地の中に住んでいるので、震災後三〜四日しても全く情報が入って来なかったんです。外を歩いている中で人に会って、「あそこに物が売ってるよ」のような情報を得て、つくづく自分には情報が大事なんだなって痛感したわけですよ。その時に近くの京屋（＊京屋呉服店）さんが、「じゃあ一日一回集まって話しよっか」と言い出されたことがきっかけで、毎朝みんなで集まって情報交換しましょうってことになったんです。震災から四日目、最初の集まりは瓦礫に埋もれた道路の真ん中に皆で集まってやったんです。

なんか他のところにはあまりないみたいですね、地元市民が自主的に集まって情報交換するのって。私たちも始めは十人くらいだったんですけど、「支給物資が欲しい人は言ってください。一緒に仲間になりましょう」っていうと、あっちの町内とかこっちの町内から増えていったんです。どこの町内でもなるべく来る人は拒まない。私としては、ずっと長いこと中心市街地がうまくいかないっていう瞬間を垣間見てきてしまったわけじゃないですか？　だから投げかけをしてるんです。少しずつ皆に投げてはいるし、会議で聞いたことは出来る限り皆にお話するんです。

私ね、心のケアって自分の体験を吐き出すことがすごく必要だと思うんですよ。つらいことでもなんでも吐き出してしまえば楽になることってすごくあって、泣かないと聞かれないような話もあるんですよ。そうやって聞いていただくことは非常に大事なことだと思います。私の場合は人よりたくさん話をして吐き出してるから、人よりたくさん元気なんだと思います。逆に聞く人は、あんまり想像しすぎないように、あんまり構えなくていいと思います。

他の方は、私の元気なのが羨ましいっていうの。それは〝気の抜き方の差〟なんだろうなって思うの。私、「明日にならないと要素の見えないことを今日深く考えないように」って気をつけてるんですね。一晩中あっちになったらどうしよう？こっちになったらどうしよう？ってずっと考えていると寝られなくなるから、明日にならないと決まらないことは置いておいて、できるだけ寝る前は本読んだりして、そっちに頭がいかないようにして。明日考えればいいことは明日考えるっていうふうにしています。

他の街区でも私たちみたいに勉強会やるって言う人がなんでいないんだろう？と思うことがあります。例えば「どういう勉強会してるか見せて」っていう人がいてもいいと思うんです。そういう人が出ないのが不思議。多分、誰かが「しましょ」っていうのを待ってるんだと思います。

この石巻という街には、総論賛成各論反対が多いと言われます。だからなかなか再開発がうまくいかないと聞きます。

今、毎朝朝礼やってて、皆が聞く耳をもって下さるから、そのうちになんとかしたい。私としてはみなさんと共にいいまちにしたいと思っていますから。市が出したことにいい悪いといってただ時間を費やすのは誠にもったいない。一歩でも前に進みたいと思っています。

あともう一つ阿部新さんと話してたのは、〝外から見た石巻〟ということで、欲しいものとか活かしたらいいと思うものをざらざらしゃべる会をやるのもいいかな、って。ハード部分で手をあげた後でいいから、そういう会もしましょうってことを話したんです。

まちの人達をちょっと揺さぶる。ずっと朝礼で揺さぶってるんですけど●

阿部紀代子

あべきよこ

割烹八幡家女将。震災直後から率先して地元住民を呼びかけ、毎朝行われる朝礼の中心的存在として、厚い信頼を得ている。まちづくりの勉強会にも積極的に参加し、同街区のより良い方向性を探る日々を送っている。

西條允敏

株式会社 街づくりまんぼう代表取締役
石ノ森萬画館指定管理者

やっぱり住民の信頼を担って行動している人が強いんです。

歴史的に、石巻は伊達藩の港町として栄えたにもかかわらず、儲けは仙台藩に集まっていました。商人が豊かになると民間の文化が栄えるのですが、仙台藩の政策により、石巻で余裕のある商人が育たなかったという背景があります。ところが港を通しての交易で人々がいろんな地方から来て、それぞれの文化が蓄積されてきました。文化活動が動き出すと、レベルの高いものが出てくる。どのようなものでも、総合芸術的なことをするんです。ミュージカルや、オーケストラに踊りを付けるとか、そういうようなものをどんどん発表して高い評価を受けるようになりました。やはり、港町が栄えたという歴史は石巻の人をつくっています。

私が育ったのは中瀬で、石ノ森萬画館の建っている真下に家がありました。中瀬には昔、人が沢山いたんです。お祭りの時の賑わいは特にすごかった。そして川と海に囲まれていて、石巻の港には全国の魚が集まってくる。野菜や米も豊富にあって、そうした自然環境に恵まれて育ったというのは、一番良かったなと思いますよ。大学は横浜に出て、そのまま就職したのですが、四年半ほどして石巻に帰ってきたんです。

私が代表を務める「街づくりまんぼう」は、これまでは萬画館の運営管理を主体にしていたのですが、中心市街地の認定を受けましたし、今年からまちづくりの方向に舵を切る予定でした。そのうちに災害が起きてしまった。本来はTMO（タウンマネージメント機関）として、事業主として独自に動けるので、まちに関わるどのような事業をどの程度の規模で行い、資金をどのように入れていくか、いろいろと検討しているところです。

今、中心市街地を活性化させるためには、定住人口を増やさなければいけません。本当は、根こそぎ失った地区の人たちをここに迎えたい。住むということになれば病院であったり、老人や子供達のことを考えた住宅をつくるべきです。建物を高床式にして個人病院を二階につくって、三階以上には育児施設などをつくる案も考えられます。そうして居住人口を増やして、便利で住みやすい環境の中で、共存共栄していくべきであると思います。大型店舗とは競争というより、私は最初から共存共栄だって言っています。向こうのほうが絶対お客さんがいっぱい来るんだから、そこではできないものを商店街でやるべきなんです。

まだ今は、おおもとの計画となるグランドデザインが策定されていないので、計画を横に見据えて動くことができないのがきつい。建築制限もかかっていますし。普通の人たち向けの住宅を中心市街地につくっていく案を進めるとなれば、門脇・南浜・湊の人が身を寄せている避難所に行って、年配の人や若い人などにもっと話を聞いて、今後どう住むべきか、考え方や希望、本当の思いを聞ければいいなと思います。一対一で話を聞けば聞くほど、本音の部分がつかめる。ある案を実現するには、住民の気持ち、住民の意思が最後の決め手になるんですよね。行政だって、案をつくってから最後になって住民を説得しなくてはいけないという立場と、住民の意見はもうこうなってるよという立場とでは、その後の進み方が全然違う。やっぱり住民の信頼を担って行動している人が強いんです。●

西條允敏
さいじょうまさとし

株式会社街作りまんぼう代表取締役社長／石ノ森萬画館指定管理者として、石巻の街作りを住民目線で考えている貴重な存在。現在のまんぼうは住民や様々な学識者を招いた勉強会を始め地域の大切なコミュニティースペースとして機能している。

http://www.man-bow.com/

魯曼亭オーナー 阿部明

石巻には石巻の文化があって、DNAに組み込まれている。

石巻は昔から遠洋漁業なんかで船に乗ってる人が多いところで、うちの親父も捕鯨船に乗ってたんだ。親父達は外国のモノを持ってくるから、ハイカラというか「仙台には負けない」という流行があったね。

四十五年くらい前、小学校四年生のときに親父が目を怪我して船を上がって、おふくろが食堂を始めたんだ。親父も目が治ると、食堂を手伝うようになって。自分は高校を出てから三年ほど、料理の勉強で東京の吉祥寺に出たんだ。そのときに外から石巻を見ることができたね。いいものは、中にいるとなかなか認識できない。たとえば、普段食卓にのぼるものがごちそうなんだよね。シャコとかおやつに出てくるし（笑）。

バーを始めたのは十四年前。それまでは食堂をやっていたんだけど、コンビニとかファミレスとかが出てきて、郊外の食堂は衰退してきたんだよね。その頃、日本酒が好きでよく仙台にも飲みに通ってたんだけど、ある店ではジャズをかけていて、女の人がひとりで来て銘柄で注文するんだ。それを見てかっこいいなぁ、と。そういう店をつくりたいなと思ったんだ。当時、石巻では日本酒をメインに出す店はなかったし、お酒には刺身というパターンしかなかったから、あえて料理はつまみだけでね。始めるとジャズ好きなお客さんが増えてきて、お客さんが店のカラーをつくってきた感じがある。ただ、客はオヤジばかりでね（笑）。店を開けて早い時間は結構ヒマで、二十三時を回ったくらいで奥さんの目を盗んで来る（笑）。

地震の後すぐに店に来たときは、まだなんとかやれるなと思ったんだけど、津波で避難した後でもう一度見たらもうきついなと。店のほとんどの物は泥でダメになって、これを全部また揃えるのは経済的にも大変だし。グランドホテルに魯曼亭を出店できるという話がたまたまあって移ることになったんだけど、複雑な思いだったね。テントみたいな所から再出発しようと思っていたし、周りにはまだ店が決まらない仲間もいるし。最近になってからやっと、ホテルでやるということをみんなに言えるようになった。

北上川は、普段静かなときに見ればゆったりとした流れで、とてもいい風景だよね。そこに何十メートルの高さの堤防をつくったとして、今回のこともあるから崩壊しないとも限らない。今回は、助かったのは安心とか安全よりも、運だったと思う。もちろん、安全を無視して街をつくるわけにはいかない。もっと内陸に住むという選択肢もあるのかもしれない。次の世代は新しいまちがあれば、そこが自分たちのベースになるわけで。ただ、安心や安全ばかり考えると、消極的なことしかできないよね。やっぱり石巻には石巻の文化があって、DNAに組み込まれている。遠くに避難している身内もいるけれど、石巻に住んでいた人は戻ってきたいと言う。それが住人の本音なんだよね。

今は外からいろいろと人が入ってきてくれて、被災した人たちはそれに関わるごとに外を向き始めている気がする。これまでの石巻は閉鎖的なところもあったけど、今はみんな窓をあけて、次は何やるんだろう、と待っている状態なのかもしれない。

亡くなった人もいるし、この震災について単純には判断できないけれども、自分に限って言えば、別のステージへ進むきっかけになるかもしれない、そう思っています。●

阿部明

あべあきら

日本酒バー魯曼亭を1996年にオープン。震災後、場所を変えて、ニュー魯曼亭を再オープンする予定。ジャズと日本酒をコンセプトに石巻の夜を盛り上げる。趣味は自転車。

沖元太一

有限会社熊谷産業　工事課長・屋根師

茅葺っていうのは、人間の身の丈に合ってる構法であり、材料であったりするんですよね。

僕はもともと建築の設計をやりたくて、地元の広島の学校で学んでました。茅葺やろうと思ったきっかけは、つくば市の民家調査を通して素晴らしい名もなき民家を見ているうちに「頭で考えることじゃなく、手を動かすことで感動させられるようないいものを作れないかな?」って思ったんです。そう考えてた時に、たまたま今の会社の社長に誘ってもらって、「よし、いいチャンスだから行ってみようか」っていう感じで今に至ったんです。

震災当日は（窓の外を指して）ちょうどこの辺から下流のほうが壊滅状態で、事務所もそこにありました。上流は床上浸水や、ここも結構水がきて、うちの会社の倉庫は半壊しました。僕は運よく休みで、自宅にいたんです。水は十日くらい全然ずっとひかなかったと思います。

うちの会社は茅葺が主な仕事なんですが、地元の仕事というより、九割くらいは県外での仕事なんです。だから、一ヶ月くらい経ってすぐに仕事を再開することができました。全国的に見ても茅葺屋根専門にやっている会社は少ないんです。我々のように材料も全部自分たちで確保してるところは、もっと少ないんです。

茅葺屋根で僕が一番惹かれるのは、それが最終的に土に還っていくことで、しかもまた自然に生えてくるんですよね。自然に生えてきて、またそれを刈り取って、屋根にのせて、何十年かするとそれが腐ってくる。またそれを降ろしてやれば、また土に還っていくんですよね。ぐるぐるぐるぐる循環できるんです。ゴミにならないです。

例えば今の原子力問題にしても、結局自分の手に負えないものを作った結果、大きなリスクを生んじゃったじゃないですか?茅葺なんて自然のものだから簡単に扱えるわけですよ。使うんであれば、なにかあった時どうにか対処できるようにしおかないと。そういう意味で、茅葺っていうのは、人間の身の丈に合ってる構法であり、材料であったりするんですよね。

この石巻でも色々な人がそれぞれ色々な変化があったと思います。自分自身の変化というか一番感じたのは、津波のあった次の日に何にも無くなってしまった土地を見て、「残すことに意味があるのかな?」って思ったんですよね。みんなお金とか物残すために一生懸命働いて残すじゃないですか。でも、津波が来てしまえば何も無いんですよね。そうすると自分たちがやっている事に意味が無くなってしまうじゃないですか?自分たちはその何かを残すためにやっているんだから。でも、その残った形に意味があるんじゃなくて、「そのプロセスであったり、やってる人の思いやそういう事に何か意味があるのかな」っていう事を感じたんです。

全くほとんど無くなってしまった状況で……石巻だって、南三陸町だって、気仙沼だって、そこにまた人が住んでいかないといけないじゃないですか?

まちを高台に新しく造ればいいって言うけど、三陸沿岸でそんなところって無いですよね?ということはやっぱり元の所に住まないといけないんです。だからといって堤防十メートルで足りないから二十メートルにしましょうとか、そういう話ではダメだと思うんですよね。津波はいずれまた来るんだから、家も流されてしまうかもしれないけど、もしそういうものが来たらすぐに「じゃあここに逃げるようにしましょう」とか、そういう仕組みづくりというのが大事なんじゃないかなと思うんですよね。

別に特にビビッと来なくたって石巻の中央歩くだけでも面白いじゃないですか。宝探しじゃないけど、良さを発信していくことが必要で、逆に地元の人も気づかされる。

何も東京や仙台ばっかり向く必要は無くて、石巻でもいろんなやり方あると思うんです。●

沖元太一

おきもとたいち

（有）熊谷産業 工事課長 屋根師。石巻市北上町にある同社は日本でも有数の茅葺屋根専門職人を有する会社として有名。沖元氏は若き伝統技術継承者として日本各地の伝統的家屋や歴史的建造物の屋根上で活躍中。

http://www.kayabukiyane.com/

失敗を恐れてはならない。
傷つくことから逃げない。
運命を変えるのも、ありじゃないか？
この世に生きる。今を見つめる。何かを果たす。
必要なのは、自らの手で未来を創るその意志。
生きた証は、自分で刻んでいくしかない。
迷わず、踏み出せ。
GO FORTH
Levi's
LEVI.JP

石巻2.0事務局のベースキャンプ、阿部新旅館から歩いて一分。

石巻のサブカルチャーを語る上で中心的存在の、サカチヨさんこと榊顯雄（さかきあきお）さんと奥さんの美香さんが、震災後、自力で始めたコーヒーショップROOTSがある。かくいう自分も、朝のコーヒーが恋しい時、自衛隊風呂の後にコーヒーとタバコで一日の疲れを癒したい時、実行委員を務める石巻2.0プロジェクトの相談がしたい時等々、在石中は本当にお世話になっている場所でもあります。

アメリカ的巨大モールを模したかのような郊外型ショッピングセンターの台頭によって、石巻の象徴だった中央商店街は年を経るごとに疲弊し、ノーフューチャーな風が流れていたそうです。

震災がすべてを奪ってしまい、石巻とここ中央商店街はとてつもない困難を前にこれから復興への長い長い道のりを歩まねばなりません。

国や県、市のまちづくりの方向性がいまだ定まらない中、それを待つ時間を無駄にせず、地元では石巻ZENKAI商店街といった草の根的ネットワークを利用した経済活動が始まりました。

そして、このROOTSの存在を見ると、そこに新しいまちづくりの原点のようなものがあると確信してしまうんです。

ストリートへの回帰。

そこから見える、まちづくりの原点。

ここには本当に色んな人達が、榊さん夫婦と石巻を応援するために全国規模で集結している。近所の人々の憩いの場となっている。ピースボートの団長がこよなく愛されている。音楽仲間がおいしい酒とつまみをもって夜な夜な集まっている。これからの石巻の将来についてアツい話し合いがされている。たまに夜ご飯も食べさせてくれる。一つしかない弁当をみんなで分け合って食べている。そしてなにより、この場を通じて始めて出逢う人達がいる……。出身、年齢、学歴、国籍なんか全然関係なくて、あらゆる人と人との交流がこの狭い何の変哲もない店内で日々行われているんです。

そこに見えるのは、古き良き時代の商店街がもっていた、人と人とのコミュニケーションの基本型。今はまだはっきりとは言えないけど、ここに集まる人達の笑顔や笑い声が、全てを現してる気がして、これからのまちづくりのヒントみたいなものがここにある気がします。

なぜなら、ここに来る度、僕は石巻のまちと石巻人がどんどん好きになってしまうから。

ちだ原人に遭遇した時の衝撃と感動は、今思い出しても心が震えます●

写真・文　石巻2.0実行委員　飯田昭雄

サカチヨさんのブログ→ http://captaintri.exblog.jp/

内海公恵

石巻商工会議所中小企業課課長補佐

住んで楽しいと思えるまちづくりがしたい。

生まれてからずっと石巻に住んで、外に出て暮らしたことがありません。

地元の高校を卒業して商工会議所に入り、今に至ります。商工会議所は、地域の経済団体です。商売をしている方々の声を集めて国に陳情したり、インフラ整備をする。小さくは、色々なお客様に対して資金繰りや確定申告などで相談役をする団体なんです。自分も子育てをして、歳を重ねるごとに、まちづくりに関わってきた部分で、やっぱり地元の石巻のために役に立ちたいなと思いますね。

震災前でも最近は、石巻のまちの雰囲気が変わっていました。私の学生時代はまちに出てくるのがすごく楽しみで、喫茶店などで青春のいろんなシーンがあったんですよ、格好いい人がいたなぁとか（笑）。そうした店が少なくなって、回遊というか遊べるまちではなくなったというのは寂しく感じていましたね。若い人たちには「こういうのがあったらいい」というニーズをくみ上げて、考えてもらいたい。ただ集まれる場所をつくればいいというだけではなくて、来てみたくなる仕掛けづくりというのかな。やっぱり市民の方々が住んで楽しいと思えるようなまちづくりがいい。そうすれば観光も、体験型・滞在型になっていくんじゃないかしら。

この前ちょっと東京に行ったときに、谷中の商店街がいいなって。車も入れないような所で、肩と肩がぶつかり合うような商店街っていいなと思ったんですね。神社の境内のような雰囲気というか、まちなみというか。また、まちを巡回するライトレールのシステムもいいですね。乗り物が立派でなくても、またはバスでもいいのですが、乗ってまちに出てきて、そこで楽しんで買い物したりおしゃべりしたり、散策したり。私が高齢者になったら、賑わいのあるまちの中に住みたい。ちょっと夜にご飯を食べて飲みに行く感じの所が近くにあれば、歩いて帰れますしね。東京でまち中に住むのはお金とか大変でしょうけど、石巻は大都市ではないし、高齢者の賃貸住宅をまちの中にどんどん建てて欲しいなと思います。石巻の魅力は、気候だったり、川や海だったりという、あまりにも恵まれている環境ですね。それが当たり前のようになっていて、外の人からいい街だよねって言われて改めて気づくという感じです。

震災では、皆さん少し落ち着いてからは、これから商売どうしよう、という感じでした。窓口を三月末に開設すると、お問い合わせだけでもすごい数になりました。早く方針を出して欲しい、というのが一番多い声ですね。このあたりは新しく建てられない建築制限の区域になっていますし。

やる気があるときに方向性が見えれば、それに向かって皆さん動いていくと思います。仮設住宅を出ても働く場がないようだと、復興の第一歩は踏み出せませんよね。また、復興やまちづくりというとき、カルチャー教室というか何かつくるようなスペースや仕掛けは面白いんじゃないかと思います。

私も、ちょっとした工房で三年くらい習っていたのですが、やっぱり物づくりって楽しいなって思うんですよ。自分で最後までつくったという達成感もあるんだけど、そこに行くことでいろんな人たちと関わりができるのが一番の財産。

人と触れ合ったり新しいネットワークが広がるという、眼に見えない付加価値が出てきますから。●

内海公恵

うつみきみえ

石巻商工会議所勤務。石巻の中小企業や地域住民の声を最も身近に受けとめながら、様々なニーズに対応する日々を送る。街作りに対する姿勢も積極的。

鮨職人

千葉隆博

復興後のまちを考えるとワクワクする。

鮨屋は代々継いできたわけではなく、親父が一代目。俺は鮨屋やる前は建築の学校に行ったんだけど、親父が店を新しくして引っ越すというのでしょうがなくというか、知らないうちに鮨屋になってた（笑）。地震の前は、正直あまり石巻に関心が無かったんだけど、いざ地震が起こって何も無くなったのを目の当たりにしたら、何かしなくちゃなって…（汗）。

そんな時に朝のミーティングに誘われて、そのうちに復興の会議があるからと声をかけてもらったのが始まり。このインタビューにしてもその延長線上なワケだし、なんとゆうか必然的でしょ？（笑）。

まちづくりに関しても、ただ放置して行政まかせにするのでなく、プランをみんなで練ってそれができるというのであれば参加したいなって思った。変わりましたよね、今じゃなかったら関われないもん。そうした意味では、タイミングがよかった。

もしかしたら、今まで話し合ってた何かが実現できるんだったら商店街も生きられるし。みんな集まって、広い土地を確保してそこに公共施設を誘致して、地権者はその上につくる住居に住んでもらうってすれば、誰も損しないシステムができるでしょう。地元に根ざしている文化センターや公民館であれば、周りの人も集まってくるだろうし。津波に強い住居をつくって、仮設住宅に入っている人たちを優先的に住んでもらえるようにして、このエリアの人口が増えればいい。そこから先は商店街（自分）次第だけれども、人が住まないことには話にならないでしょ？

新しい建物は、下を駐車場にするのを決まりにして、二階以上に住むようにする。そして、どの建物にも「水がこの高さまで来ました」っていうプレートを付けなきゃいけない。そうすれば、震災を知らない子供が増えてきても、「津波が来るときはここまであり得るのか」という意識になると思うしね。

逆に、私的な話だけど、この夏にアメリカのメイン州に渡ることになりまして…。たまたまラジオで「家族で来れる人」「鮨が握れる人」という条件で募集していたのを奥さんが聞いたんだね。現地に支援したい人がいて、空き家を三年間貸せると。働き口も面倒見てくれると。「石巻から逃げるんでしょ？」と言われれば、まぁそうなんだけど、復興計画が策定されるのが今年の秋からで、地盤が整うにもそれから長いことかかる。地元の魚の入手がままならないなかで、その間仕事しないとダメ人間になっちゃうでしょ？（笑）やっぱり三ヶ月も仕事しないと労働意欲がなくなっちゃうし…それこそ、復興の第一歩は仕事をすること。まあ、したくても出来ない人の方が多いんだけど。それなら期限を区切って行ってみるのも面白いんじゃないかと。自然の流れからして、呼ばれているような気がしたもんね。今回、うちの母親も津波でやられちゃったから、まあそれもあるし。

これまでの石巻では、まちづくりやイベントは小さなグループだけで集まって、その中だけで盛り上がってるイメージがものすごくあった。震災で逆にこうなれば、不可能なことも本当にできそうな気がするじゃない、今だったら。

三年後、今まで頑張りたくても頑張りようが無かった状況から、頑張った分だけ報われる、そういうまちになったらワクワクするよね。誰かが考えたまちじゃなくて、みんなで考えて「こんなのがあったほうがいいんじゃない？」みたいな。もちろんそれに伴っていろんな問題も出てくるだろうけど、納得できるよね。●

千葉隆博

ちばたかひろ

助六鮨・鮨職人。今夏、家族と共に渡米。海を渡り新たな挑戦へと臨むも、3年後には石巻に戻ることを誓う。

復興の足がかり ～イベント・出来事タイムライン～

作成　東京工業大学真野研究室

私たち真野研究室は、震災からおよそ二ヶ月が経った5月17日に初めて石巻を訪れました。それ以降、週に1～2回のペースで4日間程度の滞在を重ね、計21日間、石巻の方の話を聞く機会をいただき、商店街の朝会や復興に向けたいくつかの勉強会への参加・手伝いを行ってきました。そうした中から、震災前の街の様子や、震災直後にどのようなことが起こったか、そしてそれから街の中でどのような活動が見られるようになったのかを知ることが出来ました。

これまでお話をうかがった方からの情報を元に、震災以降石巻の中央商店街周辺で起こったイベント・出来事を時系列に沿って整理してみました。未曾有の大災害の後でこれだけの多様な動きが起きており、街の再建へと向かっていることに、石巻の人々の力強さを感じることが出来ます。ここに載せた6月末までの活動以降も、さらに多くの動きが街のあちこちで生まれていきます。

3月

3月12日～
避難所リーダー会議　@石巻高校
避難所間の連絡、情報交換、意見の吸い上げなど
その後「避難所ネットワーク会議」に

3月17日～
ピースボートによる災害支援 ❷
泥かき、炊き出し、物資運搬など

3月20日～
石巻NPO連絡調整会議
被災地の情報を共有し、支援方法の検討する会議

3月27日～
自衛隊風呂設置
@丸光百貨店跡地 ❸

4月16日
避難所上映会　@石巻高校避難所
(株)ワーナーマイカルの協力のもと、映画上映会を実施

3月15日～
生きるための朝礼
@ホシノボックスピア1階 ❶
アイトピア商店街周辺の住民同士の情報共有

3月21日～
石巻こども避難所クラブ
@石巻の各避難所
絵本の読み聞かせ、お絵描き教室などのレクリエーション

4月

4月16日～
わんぱく復興プロジェクト
NPO石巻スポーツ振興サポートセンターにより、避難所や保育園、tOtOコートにてボール遊びやゲームラリーを実施

4月中旬～
BEING　@BEING
生演奏バー。地元の人々がゲリラ的に生演奏をしている

4月中旬～
レゲエ炊き出し
@内海橋
夜に行われるアルコールを交えた炊き出し

5月

5月5日
マンガッタン祭り　@中瀬公園 ❹
おもちゃやお菓子の配布、シージェッター海斗・プリキュアのショー、ミニマンガらんたん作りなど

5月7日～
RIP～石巻ZENKAI商店街～活動開始
店舗が全壊した商店街の有志により、復興を旗印としたグッズの企画・販売など

5月15日
第一回コフレプロジェクト　@亀七 ❽
NPO「コフレPJ」による化粧品の試供とメイクアップデモンストレーション

5月18日
VOICE「私の石巻」インタビュー開始

5月19日
石巻商工会議所主催勉強会
@グランドホテル
（被災者支援施策説明ワンストップ相談会）
被災した事業者を支援するための国などの支援施策の説明

6月

6月3日
ラストライブ
@La Strada ❺
相沢さん主催のラストライブ。ガレージシャンソンバンドの山田晃士&流浪の朝謡

6月5日
いしのまき福興市
@小西ビル ❻
NPO石巻スポーツ振興サポートセンターによる、被災商品や新品、中古品、手作り品などのフリーマーケット

6月6日
パブリックビューイング
@石巻小学校校庭
キリンカップサッカー2011
日本対チェコ戦

6月8日
松川横丁の再建
に向けた勉強会
@ほーぷす ❼
家の再建方法を模型を使いながら地域のみなさんと考え中
第1回　6月12日
第2回　6月20日
第3回　6月27日

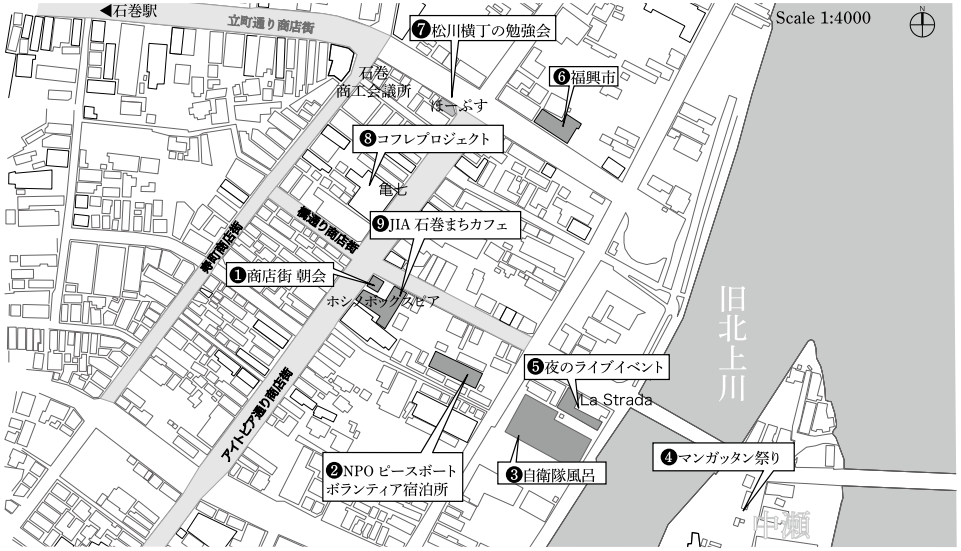
6月15日
第二回コフレプロジェクト　@亀七 ❽
NPO「コフレPJ」による香水とソプラノ歌手デモンストレーション

6月16日
NPOネットワーク集会　@グランドホテル
せんだい・みやぎNPOセンター、日本財団、IIHOEの協力で全国のNPO法人があつまり、情報交換、団体間交流を行う

6月18日～19日
日活パールファン感謝祭上映会
@日活パール
震災後初の上映会

6月18日～26日
みんなの表札展
@BOYS GALLERY
東北大地域振興プロジェクトの一環である「石巻ワンダー横丁」の取り組み
高校生と先生が仮設住宅のみなさんにプレゼントする表札を作成して展示

6月19日
石巻まちカフェオープン
@ホシノボックスピア2階 ❾
日本建築家協会宮城地域会により、地元の再起を図る人や大学の活動拠点となる場所を整備



毎日が、はじまりの日だ。
毎日が、新しいなにかに
挑戦するための日だ。
手に入れた力を証明するための、
すべて出しきるための、
理想に近づくための、チャンスだ。
プレイで自分を表現するための、
そして、再びスタートするための、
毎日が最高のチャンスだ。
JUST DO IT.
NIKE.JP
©2011 NIKE All Rights Reserved. Nike Japan 0120-500-719

自然をひとつに、自然とひとつに。

人の暮らしに欠かせない自然の恵みを有効に活かすのは、私たち一人ひとりの責任といえます。ミツウロコは、LPガスをはじめ、風力発電や太陽光発電など、自然の営みと一体となった次世代エネルギーの開発・普及を積極的に推進。安心・安全・快適な毎日を提供しています。

We love earth
株式会社ミツウロコ 東北事業部 石巻店 〒986-0863 宮城県石巻市向陽町 1-1-25 TEL:0225-21-2656

ISHINOMAKI 2.0 vol.0
VOICE
2011 年 7 月発行

編集長
飯田昭雄（ワイデン＋ケネディ トウキョウ／石巻 2.0 実行委員）

編集協力
東京工業大学大学院社会工学専攻　真野研究室
真野洋介（石巻 2.0 実行委員）
荒川佳大　石際由美　速水検太郎　渡邊享子
内西哲朗　大村一仁　坪内舞子　野村美里
石川怜也　加納亮介　堀口拓未　宋　暁丹
阿部久利（有限会社 阿部新代表取締役／石巻 2.0 実行委員）
松村豪太（NPO 法人石巻スポーツ振興サポートセンター／石巻 2.0 実行委員）
加藤純

アートディレクション／グラフィックデザイン
真木大輔（ワイデン＋ケネディ トウキョウ）
吉川一陽（ワイデン＋ケネディ トウキョウ）

写真
小泉瑛一（オンデザインパートナーズ／石巻 2.0 実行委員）

印刷
株式会社 第一製版

発行
石巻 2.0 事務局

本誌記事の無断掲載を禁じます。

http://www.ishinomaki2.com

www.ishinomaki2.com

TAKE FREE